

松尾町中谷遺跡の中近世墓地と集落

—中近世における谷津景観の復元—

井上 哲朗

1. はじめに

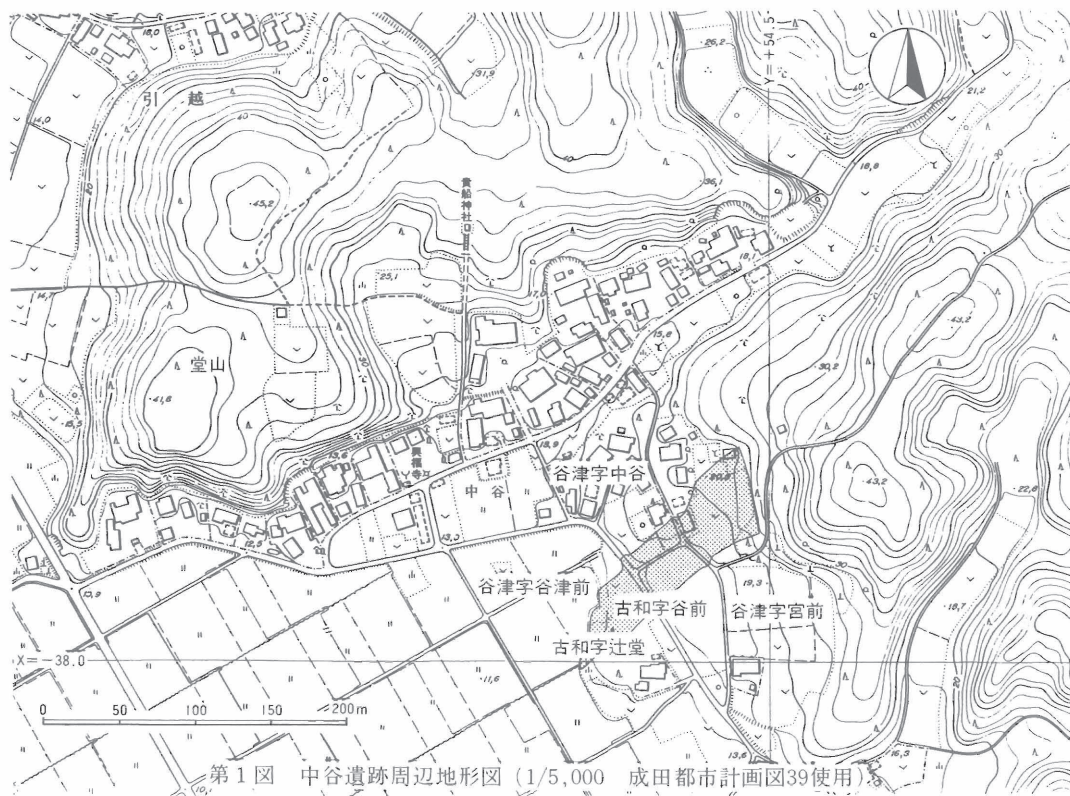
中谷遺跡^{なかやつ}は山武郡松尾町谷津字中谷他に所在し、太平洋に流入する木戸川が台地を樹枝状に開析した幅400m前後の谷津内左岸、標高7m~24mの緩傾斜地に存在する。その立地は、台地裾部及び南西方向に開口する小支谷に展開する中谷集落の東端部に位置し、千葉県内、特に土地区画整理が早くから進行した北部での発掘調査のほとんどが台地の上で実施されてきた中において、数少ない調査例である。発掘調査は千葉東金道路(二期)建設に伴って平成6年度に5,650m²を対象に実施された。

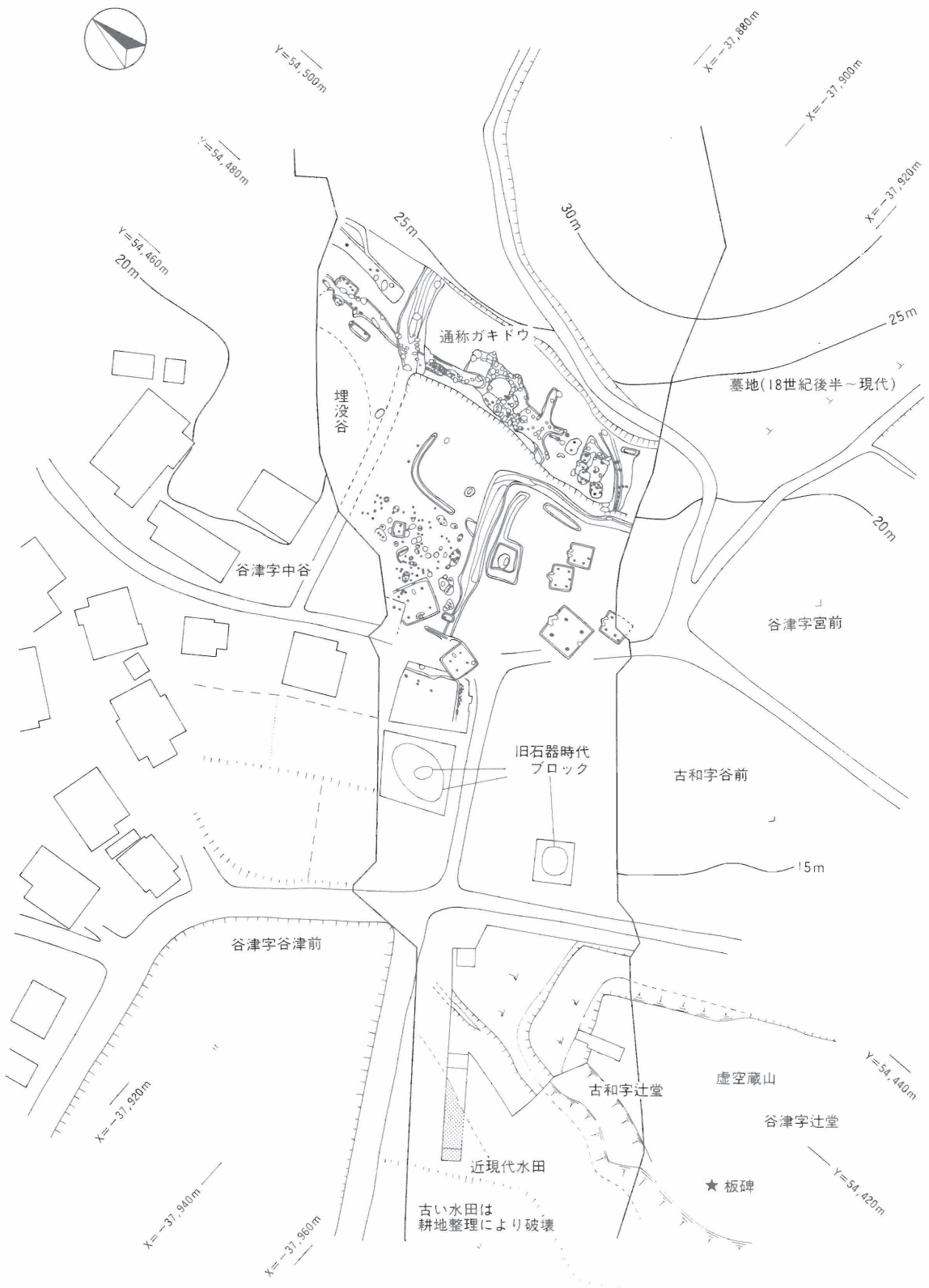
検出遺構は、旧石器時代石器ブロック3カ所、古墳時代~奈良・平安時代竪穴住居跡9軒、中世~近世建物域(柱穴群)、墓域(土坑墓100基以上)、

溝跡、道路跡等である。本稿は、その中で中近世の遺構・遺物の概要を紹介し、谷津景観の復元を試みたものである。しかし、現在未整理段階のため、遺構・遺物の詳細や解釈については、今後の整理作業によって若干の違いが表出するものと考えられることを予めお断りしておきたい。

2. 歴史的概観と景観(第1・2図)

中谷遺跡の存在する地域は、古代には武射郡内、中世には一時武射北郷(郡)内、鎌倉末から室町期には山辺庄古和郷、戦国期には武射郡古和郷、近世初頭には山野辺庄古和郷谷津村、古和村に該当するとされる⁽¹⁾。なお、13世紀半ばに成立し14世紀前半には解体した伊勢神宮領武射御厨に当地域が含まれるのかは不明である。





第2図 中谷遺跡遺構配置図 (1/1,000) 0 10 20 30 40 50m

中谷遺跡及びその周辺においては、調査前段階から中近世の景観をある程度想像できる様々な資料が存在した。調査区北部は「谷津字中谷」の一部であるが、北東部の山の傾斜にかかるテラス状の部分は通称「ガキドウ」（餓鬼堂）と呼ばれ、調査区南西部の小高い山が「古和字辻堂」、通称「虚空蔵山」と呼ばれ、その南端部にはそこから出土した応安6年（1373）年銘の武蔵型板碑（高さ48.0cm、幅23.5cm、厚さ2.0cm）を始め、6基の板碑が町指定文化財として保存されている。これは、対岸の古和集落内に存在する観福寺（真言宗）境内出土ともいわれている⁽²⁾ことから、同寺がかつて存在した場所の可能性がある。また、地元の方のお話によれば、中谷集落内に現存する「興福寺」（天台宗）には墓地がなく、かつては裏山の通称「堂山」上に存在したとのことなので、或いは谷津村の主な信仰対象寺院は裏手に墓地の存在する旧観福寺であった可能性が考えられる。以上の様に、当遺跡部分は西側に展開する中谷集落と寺院や墓地との接点部分であり、谷津村と古和村の境でもあり、まさに集落の辻に位置する境界領域ではないかということが推測されたのである。

さらに、周辺に目を移すと、木戸川を挟んだ対岸の緩傾斜地（現在赤羽根遺跡として調査中）の下の水田域は「古和字市場」であり、古和集落中心部には「字竹ノ花」の地名と微高地上に立地する古和館跡が存在する。古和館跡は土塁・空堀で囲まれた一辺約60mの方形館跡で、筆者が最近発見したものである。また、北東1.2kmには山室城跡、南東1.3kmには蕪木城跡が存在する。山室城跡は飯櫃城へ移動前の山室氏の本城と考えられ、平成3年に急傾斜対策工事に伴って主郭の南側斜面の発掘調査が実施され、14世紀代～15世紀代の陶器が出土したが、全体の縄張構造を考慮すると、15世紀前半に築城されて16世紀後半まで使用された城跡と推測されるものである⁽³⁾。蕪木城は13世紀に蕪木郷を領有した匝瑳北条荘の籙木氏の一族蕪木氏の城に推定され、戦国末期には里見氏と争い、天正18年の『関八州諸城覚書』⁽⁴⁾にも後北条方として「上総衆」の「蕪木駿河守三百騎」として登場する⁽⁵⁾。

以上の様に、中谷遺跡周辺は中近世の景観を想像できるだけでなく、現在もその景観を残しているものと考えられる。

3. 中近世遺構の概要

(1) 墓域（第3・4図）

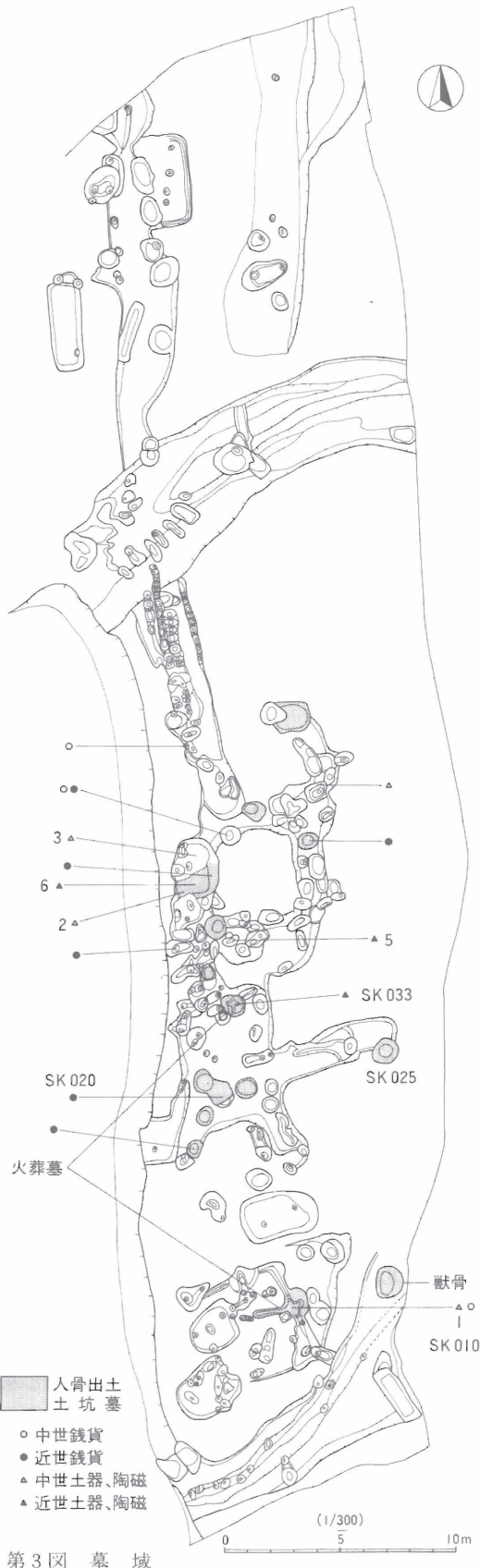
調査区の北東部、山裾の傾斜が急となる位置に若干の傾斜を有する平場が形成されている。この平場が「ガキドウ」（餓鬼堂）と呼ばれる地区である。ただ、低地側（西側）が土坑群を崩してカットされて高さ1m程の崖になっていることから、近代以降の畑造成によるものと考えられる。恐らく当初は北側と同様に大きな段差を有していたわけではなかったものと推測される。

遺構の基本構成は、奈良・平安時代堅穴住居跡の上部が削平された後、上下2段のテラス内に土坑墓群、ピット群、道路跡などが存在し、特に中央部には土坑墓が集中している。なお、これらの遺構を、台地の上と低地をつなぐ2本の道路跡が切っている。出土遺物からは、前者が14世紀後半～18世紀初頭、後者が18世紀後半から19世紀代の遺構と考えられる。

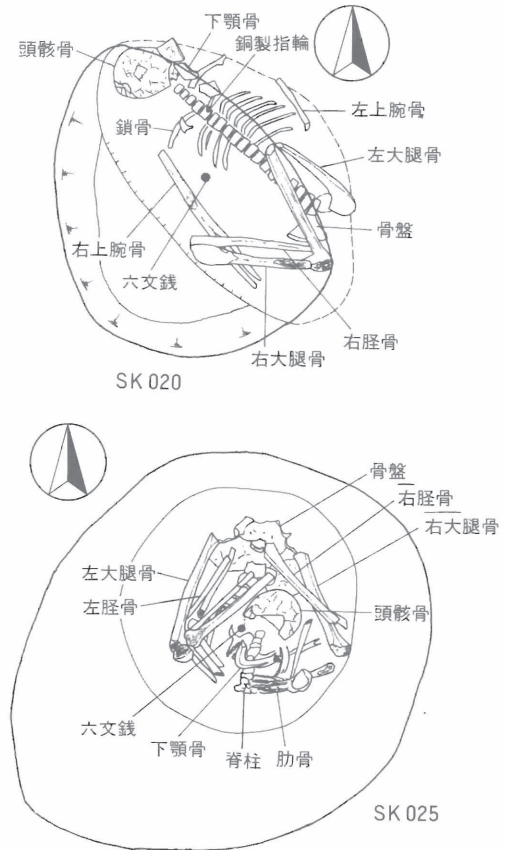
火葬墓 確実に火葬墓と判断されるものは2基である。S K010は細長い十字状の溝からなる遺構で、植物灰や火葬骨中にカワラケと北宋銭を伴っていた。S K033は円形の掘り込みの底部が十字の溝状を呈しており、火葬骨の他、覆土上層から17世紀後半の天目茶碗の破片が出土した。ただし、この天目茶碗の同一個体と考えられる破片は離れた遺構にも散っており、S K033に伴うものではないと考えられる。

土坑墓 円形土坑のほとんどが土坑墓と考えられるが、人骨が若干でも残存しているものについては図上でスクリーン表示した。その内、S K020とS K025は人骨の残存状況が良好なので紹介したい。S K020では浅い半地下式土坑に頭部を北東方向に向け、背中を下に、脚部を曲げて埋葬されたものである。S K025では深さ2m程の円形の堅坑の底に膝を立てて座った姿勢で埋葬されたものが、頭部が腹側に落ちた状態と判断され、樽状の棺桶（早桶）に入れられていたものと考えられる。両者ともほぼ中央部に寛永通寶（文銭・17世紀後半鑄造）の六文銭を伴っていた。

その他、注目すべきものとして、周囲には土坑墓の激しい切り合いがあるにも関わらず、一辺約3mの遺構の空白域が存在することである。これは明らかに上に何らかのものが存在したことが考えられる。12世紀後半に描かれた絵巻物『餓鬼草紙』



第3図 墓域



第4図 人骨出土状況 0 (1/20) 50cm

の中で、石塔の立つ塚が並び、死体の転がる中で餓鬼が死体を食らう様子が描かれているが、この地区も塚或いは3間四方程度の小規模な「堂」の存在が想定される。後者であったとすれば、これこそが、正に「餓鬼堂」であったのかもしれない。一方、「虚空蔵山」(寺院存在)の板碑の存在と対比すると、後方の墓地の被葬者は一般農民で、「虚空蔵山」には階級により上位の上層農民(土豪)もしくは僧侶が考えられる。

(2) 建物域 (第5図)

調査区中央北部において、約20m四方の範囲で、柱穴・土坑・方形竪穴建物跡などが集中して検出された。これらは全体として北北東-南南東の主軸を有するものと考えられるが、建物等の配置については今後の整理を待って考えてみたい。注目すべき点は、この部分が調査前には宅地として登録された大型の物置が存在した部分であることで



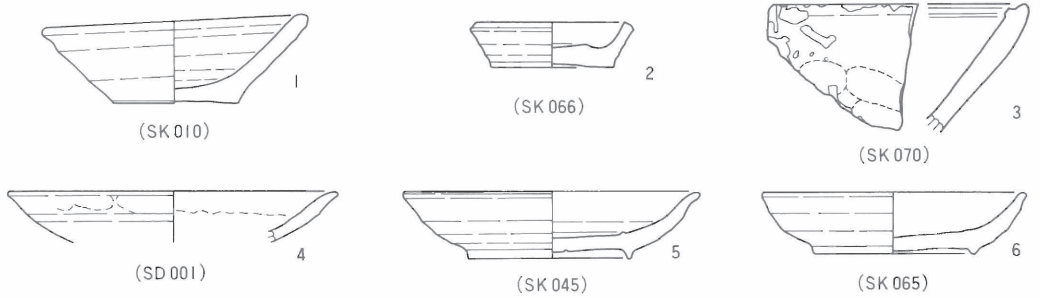
ある。さらに、この部分の主軸は南側で検出された溝と平行し、この溝と西側の溝に囲まれて、その外側の平地には柱穴や土坑は存在しない。また、現道の下にも道路跡が検出されていることから、建物域は溝や道路によって区画されていることが推測でき、建物域の溝を隔てた反対側は畑地であったことも想像できる。

柱穴 建物を復元することのできる明確な関係は難しいが、柱の「当たり」部分の高さがソフトローム面或いはその上20cm程の厚さの黒褐色土層が旧表土層と考えられることが調査区境の壁からも明らかになっており、掘ることのできた穴が柱穴の全てではない。形態は直径15~20cmの円形のもの他、内部に複数のピットを有する不定形の土坑が存在する。後者については切り合いや柱抜き

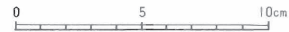
取りの際の掘り返しの可能性が考えられる。なお、遺物としては柱穴内覆土中から南宋銭や砥石が出土している。

方形竪穴建物跡(S I 008) この区画の北寄りに、約2.0m×約2.5m、深さ約1mの竪穴が存在する。床は踏みしめられており、ピットは3カ所に存在する。北西隅のピット内には壁沿いに廃棄された植物灰が溜まっていたが、その意味は不明である。また、他の2基のピットはほぼ中央と東壁寄りに位置するものでありバランスを欠くが、柱穴と考えられる。この形態は、未報告ながら15世紀代を主体とする成田市駒井野西ノ下遺跡で複数検出されたものと同一である。

その他の土坑 径0.5m~1.0m前後、深さ20cm前後の浅い土坑がやや南側に多く存在する。これら



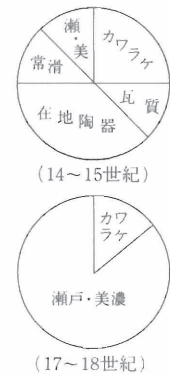
第6図 出土遺物 (1/3)



	10世紀	11世紀	12世紀	13世紀	14世紀	15世紀	16世紀	17世紀	18世紀
カワラケ						-----		-----	
瓦質播鉢						-----			
在地陶器類						-----			
渥美壺			-----	-----	-----	-----	転用砥石		
常滑類						-----			
瀬戸・美濃皿、椀						-----		-----	
銭貨		-----			-----	-----		-----	
石塔						-----			

第1表 遺物組成表

※カワラケ、瓦質播鉢、石塔の年代は他遺跡の陶磁器とのセット傾向から推測



第7図 器類組成図

には柱の「当たり」は検出できず、或いは曲物使用の土坑墓である可能性はあるが、遺物をほとんど伴わないため、性格不明である。

4. 遺物 (第6・7図、第1表)

遺物は、執筆者が目につくものをピックアップしたにすぎないが、墓地を切る道路跡覆土中の18世紀後半以降の遺物以外の中近世遺物の8割程(僅か20点)はチェックできたものと考えられる。実測図はその内、主な遺物である。

1はカワラケ。SK01(火葬墓)出土。口径10.0cm、底径5.0cm、器高3.0~3.5cmで、カワラケとしては焼成が良好なものである。底径に対して比較的器高・口径共大きく、器形、焼成とも伊西町大塚塚群出土の常滑壺に宋・明銭と共に8枚入れられたカワラケと似ていることから、15世紀代の所産と考えられる。2もカワラケ。SK066(土坑墓)出土。口径5.8cm、底径4.8cm、器高1.8cmの小型のもの。口辺部の内外面にススが附着しており、灯明皿の上皿として利用されたものと推測される。形態としては、中近世を通じて見られるものであ

ろう。3は瓦質播鉢。SK070(土坑墓)出土。15世紀代の所産と考えられる。4は美濃縁釉小皿。SD001(溝)出土。推定口径13.0cmで、灰釉は縁だけでなく、内面はその下も全体にハケ塗りされている。古瀬戸後期I期、14世紀後葉の所産と考えられる。5は美濃灰釉小皿。SK045(土坑墓)覆土上層出土。口径11.4cm、底径6.4cm、器高2.6cmで、全面施釉である。17世紀後葉の所産と考えられる。6は志野小皿。SK065(土坑墓)覆土上層出土。口径10.2cm、底径6.3cm、器高2.4cm。灰白色の全面施釉である。17世紀前葉の所産と考えられる。

その他の実測図外の遺物を含めた器類の破片数の割合は、カワラケ15%、瓦質播鉢5%、在地産と見られる無釉陶器15%、渥美25%、瀬戸美濃35%、常滑5%である。この内、12世紀~13世紀の所産である渥美については、砥石として再利用されたものである。

一方、銭貨については、宋銭はあるが、永楽通寶・洪武通寶等の明銭はなく、寛永通寶は古寛永銭(17世紀前葉)~初期段階の新寛永銭(17世紀

後葉～18世紀初頭)で、18世紀前葉の元文銭や19世紀前葉の波銭は出土していない。

また、墓域表土から五輪塔空風輪の砂岩製風輪部(高さ10.5cm)が出土している。断面がやや扁平で、14世紀から15世紀代のもものと推定される。

以上、出土遺物から考えられる中谷遺跡の年代は、14世紀後葉～15世紀中葉と17世紀前葉～18世紀初頭の2時期であることが明らかとなった。一方、南隣谷内石塔群は18世紀後半以降で、造塔に伴って墓域が移動したものと考えられる。

5. まとめ

千葉県北部においては、中近世集落跡の発掘調査例は非常に少ない。その理由としては、現在の自然集落の下に埋もれているからであろうという想定がなされてきた。16世紀代の生活面が検出された芝山町飯櫃城跡の下の根古屋地区⁽⁶⁾や中谷遺跡の様に谷津や山裾部に展開する集落はその代表的な例である。中谷遺跡で検出された建物域はその上にあった建造物の下にあり、現在とほぼ合致した区画を持ったもので、近接して検出された村境の墓域と共に14世紀後葉以来のものであったことが明らかとなった。これは、従来の想定通り、現在の自然集落の下に中世以来の集落が存在した一つの証拠となると考えられる。その歴史的背景としては、溝や道路を境として土地を区画する意識が中世以来顕著化したためではないだろうか。つまり、「一所懸命」の土地が近世、そして現代へと引き継がれた結果とは考えすぎだろうか。また、房総でも近畿地方の様に散村形態を呈していたであろう中世前半の集落⁽⁷⁾が、14世紀から15世紀にかけて集村化された可能性が考えられる。

なお、近年は台地上でも成田市駒井野荒追遺跡⁽⁸⁾、駒井野西ノ下遺跡、袖ヶ浦市山谷遺跡⁽⁹⁾などで15世紀前葉主体の、酒々井町大堀遺跡⁽¹⁰⁾では16世紀代の集落や屋敷跡と推測される建物群が検出され、城館跡内部でも光町篠本城跡⁽¹¹⁾(15世紀代)や木更津市笹子城跡⁽¹²⁾(15世紀中葉～16世紀前半)などで同様な遺構が検出されており、多様な集落立地が確認されつつある。柴田龍司氏は主に君津郡域の発掘調査例から、12世紀以来沖積地で続いた集落が15世紀中葉以降消滅すること、この15世紀中葉に城館が築城される例が多いことから、集落が城内に取り込まれたのではないかという説

を展開している⁽¹³⁾。果たして、一般農民が主体と考えられる集落や墓地の跡である中谷遺跡でもなぜか、15世紀中葉～16世紀代には遺物の空白の時期が存在する。しかし、この時期のみに集落が移動してしまったと考えられるだろうか。村落共同体としての有機的関係をもったはずである生産地や宗教的施設を残して移動できたであろうか。城内に取り込まれた、或いは主体的に入ったのは上層農民だけではないだろうか。遺物の空白が生活がないといえるかどうかも含めて、これらをどう解釈していくか、今後も考えていきたい。

注

- (1)『松尾町の歴史 上巻』
松尾町史編さん委員会 1984年
- (2)『千葉県地名大辞典』角川書店 1984年
- (3)井上哲朗『松尾町山室城跡』
助千葉県文化財センター 1992年
- (4)毛利家文書
- (5)注(1)と同じ
- (6)柴田龍司『千葉県中近世城跡研究調査報告書第7集』千葉県教育委員会 1987年
- (7)例えば、環濠集落は15世紀に集村化したものと考えられている。
- (8)林田利之『駒井野荒追遺跡』助印旛郡市文化財センター 1994年
- (9)柴田龍司「鎌倉街道と市」『千葉県文化財センター研究連絡誌41』1994年
- (10)『助印旛郡市文化財センター年報10』1994年
- (11)『シンポジウムよみがえる篠本城跡』資料
助東総文化財センター 1995年
- (12)柴田龍司「笹子城跡の概要」『千葉県文化財センター研究連絡誌37』1993年
- (13)柴田龍司「中世城館の構造とその変遷—千葉県内の発掘成果を通して—」『千葉県文化財センター研究紀要16』1995年

参考文献

- ・中野登任『忘れられた霊場』平凡社選書 1988年
- ・笹生 衛「東国における中世墓地の様相—房総の事例を中心に—」『千葉県文化財センター研究紀要16』1995年
- ・藤澤良祐「瀬戸古窯址群II」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要X』1991年



1. 調査区全景



2. 調査区北東部近景



3. 墓域北側



4. 墓域南側



5. 建物域



6. S K 020人骨出土状況



7. 南隣谷内近世末～現代墓地



8. 「虚空蔵山」板碑群